

動坂界隈の作家たち

大槻岐美さんインタビュー

大槻岐美（おおつき・きみ）さんは、心理学者・文芸評論家、大槻憲二（一八九一―一九七七）夫人。大槻憲二氏は大正七年早稲田大学文学部卒業後、東京精神分析学研究所を設立、主宰。精神分析の立場から、旺盛な評論活動を行い、翻訳を含めて数多くの著作をのこした。二〇一一年三月、大槻岐美さんより、所蔵されていた大槻憲二宛フロイト書簡ほかの関係資料を、ご縁あって早稲田大学図書館へお譲りいただいた。その際、九十歳をはるかに越えた岐美夫人が、兼築・松下に向かつて、夫妻が戦前住み、東京精神分析学研究所において活動の拠点としていた本郷動坂界隈で交際があった作家たちの思い出を語られたが、きわめて興味深い内容であり、また、とても生き生きとして、聞き流すには惜しいお話であった。そこで六月、岐美夫人のお許しを得て、宗像政経学部教授を聞き手に、あらためて栃木県西那須野のお宅へうかがい、インタビューをとった。本稿はその記録である。（編集委員会）

二〇一一年六月九日（金）

於 栃木県西那須野町 大槻家

大槻岐美さん（故大槻憲二氏未亡人）

長井那智子さん（故大槻憲二氏令孫）

ききて：宗像和重政治経済学部教授

同席：兼築信行文学部助教授（図書館副館長）当時

松下真也（図書課長）奥村佳郎（学術情報課）



大槻憲一と東京精神分析学研究所

兼築 今回フロイトの資料などを私どもへお譲りいただきましたので、そういうお話もつかがいたいと思いますが、たとえば高村光太郎さんですとか泉鏡花あるいは平塚雷鳥さん江戸川乱歩さん、そういった作家や詩人や文学者とかかわりを中心にお話いただければと思っております。宗像教授はそのあたりが専門でございますので、お話にてでてるものについては、さらにおつかがいしたり、相槌打ったりとかできるんじゃないかと思ひまして（笑）……

大槻 私の方も、あんまりよくわからないかもしれませんがどね。なんていうのですかね、この……

兼築 そのあたり、ご自由にお願ひできればいいと思います。

宗像 私などは、本の上だけでしか知らないことが多いものですから、いろいろつかがえるのは非常にありがたいので、楽しみにしてまいりました。

大槻 話すほど、人格にもかわるもんですから、あんまりね……（笑）。

松下 そういふことはないですよ、だいじょうぶ（笑）。

兼築 あまり堅苦しく考えないでいただいて、普段着のような形で、思ひ出話をしていただければと思います。よろしくお願ひします。

宗像 それでは、最初に、ご紹介からさせていただきます。

今日は、精神分析学の研究者で、批評家としても幅広く活躍されてきた大槻憲二先生の奥様、岐美夫人にお話をうかがう機会

を与えていただきました。私たちは栃木県那須野町のお宅に今お邪魔しています。来る途中、今日はあいにく雨だったのですが、本当に緑が綺麗で、麦も実っていて大変みごとな景色でした。終戦間際に疎開してこられて、それからずっとこちらに……？

大槻 戦争なかばくらい。駅の向こう側に疎開していたんです。でも大槻が、遠慮なく、軍部にでも何にでも抵抗して、軍部で「ぜいたくは敵だ」という標語を出しましたの、ご存じ？ そうするととたんに大槻が、「ぜいたくは果たして敵か」というような講演をいたしまして、憎まれておりましてね。

宗像 そういふことを言うのはなかなか大変なことですね。

大槻 ええ。本当にまあ、逃げてきたようなものでした。知らないでおりましたらね、尾行がついておりました。

宗像 そうだったんですか。

大槻 で、何日に誰とどこ行っただけど、どういう用で行ったんだ、とあとでいわれましてねえ。

宗像 今もずいぶん閑静な、静かなところですが、やはりその当時は、このあたりの風景もずいぶんちがっておりましたでしょうね。

大槻 本当に、荒れはてた農村でした。開拓地でございます

からね。いまとは違いましたよ。

宗像 で、開墾というか、畑作業、農作業なさりながら……

大槻 大槻はちつともいたしませんよ、私がいちしました。

ヒツジを飼いましたね。それから……物好きで、私がいるんなこといたしましたよ。丹精いたしました。好きなんです。

宗像 それ以前は、本郷動坂ですね。大変にぎやかなところに住んでいらつしたので、やっぱり環境が、全然ちがいますね。動坂のご自宅に、東京精神分析学研究所というのをつくっておられて……。

大槻 そうです。

宗像 奥様もその仕事をずいぶんお手伝いになっていらつしたんですね。

大槻 そうですね、ずいぶん使われました（笑）。

宗像 ははは、そうですね。そこでの主なお仕事の一つがフロイトの全集（注・昭和四年から刊行された「フロイド精神分析学全集」全十巻）だったと思つたんですけど。

大槻 ええ、そこに。（フロイト全集をゆびさす）

宗像 こちらのお部屋にも、フロイトの写真があらまして。

こんど、早稲田の図書館に、フロイトの貴重な書簡をお譲りいただいて、私たちも大変ありがたいと思つていますが、全集などをつくっていく中で、フロイトとの交流があつたということなんでしょつか。

大槻 しゅつちゅつ、手紙の往復がありました。フロイト先

生は、こつちが英文で手紙を書きますと英文で返事がくる、ドイツ語で手紙を書きますとドイツ語で返事を下すつた方で、よく実直にお返事下さいましたし、手紙も下さいましたよ。

宗像 そうですか。ずいぶん頻繁にやりとりがあつたわけですね。

大槻 その後、戦争でそれつきり。そのうちフロイトは亡くなりましたでしよ（注・一九三九年に歿）。ですから……

宗像 晩年のフロイトとのつながりの中では、非常に重要な手紙ですね。

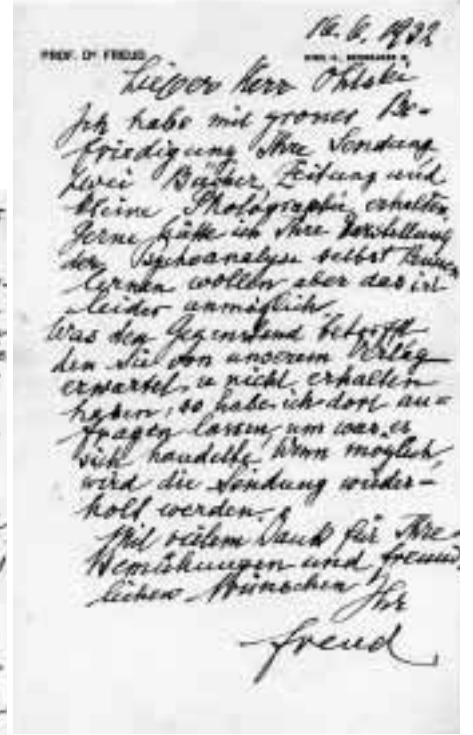
大槻 そうですね。ええ。

宗像 ドイツ語や英語でというお話でしたけれども、大槻先生は、私たちの先輩で、文学部の英文科を出ていらつしやるわけですね。語学が堪能だったんですね。

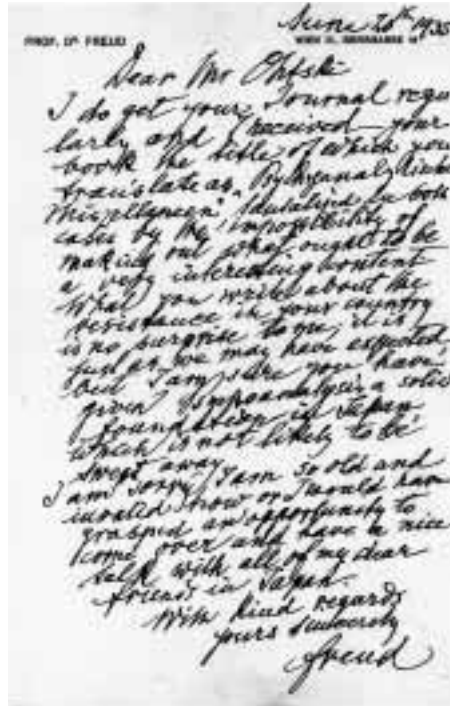
大槻 そうらしいです。しゃべる方はどうか、しゃべりもしましたけど、元来が無口な人でしたからね。書いたりする方が得意だったんじゃないでしょうか。

宗像 フロイト全集の仕事は、もう半分以上大槻先生の仕事ですね。

大槻 ほかの方の名前でも、実質は大槻が翻訳してるんです。あの時分、分析学一生懸命やろつ、本当にやるうって人少なかったですよ。第一、官学派からは、まるで、まったく、悪魔の心理学のごときことを言われましてねえ。そうなんです。大槻が本を出しますとね、その本屋に官学派の人が乗り込んで、な



大槻憲二宛 フロイト書簡



んで大槻の本を出すんだって言って、その社長さんに文句言ったそうですよ。それで、その本屋さんには、面倒だと思っただでしょう、「いや、私は売れさえすれば出すんだよ。本屋ですから。あなた方ももし出したかったら、売れる本書いて下さい」とって言って帰したそうです。

宗像 そうすると、精神分析学研究所をおつくりになられたのも、そういう余計な干渉を受けないで出したい本を出すとか、発言をするということもあつたわけですね。

大槻 そういうこともあつたでしょうね。とにかく、これ申してはどうだかわかりませんが、官学派の人には、やらされました。いまだに文句言ってるらしいです。

宗像 私も精神分析学や心理学はまったく専門外なのでわかりませんが、早稲田の図書館に入っている大槻先生の本を拝見しますと、狭い講壇の中に閉じこもって自分の仕事だけをしていくのではなくて、精神分析というものが、どういふふうに人々の生き方を助けるかとか、影響を与えるかとか、そんなことに非常に深い関心を持っておられたな、ということを感じておられますね。

大槻 あ、そうですね、いやそんな。

宗像 先生の本を読んで二つのことを感じまして、一つは非常に学際的だということなんです。学問のいろんな領域にわたって関心をお持ちでいらっちゃって、映画の本なんかもございませぬ。

大槻 そうなんですの。

宗像 映画もお好きでいらっちゃった。

大槻 ええ、よく……だけとちょっとあの、何て言うんでしょう、覚りの悪いところがありましてね、一緒に映画に行きます、そうすると見ていましてね、私をひっぱるんです。「あれ、何だい？ どういうわけでこういふことになっ」(笑)

宗像 ははは。でも心理学の専門家でいらっしゃるのにおかしいですね。おもしるいですね。

大槻 それが、ドイツ映画で、こ存じないでしょうけど、「産めよ、ふやせよ」でもって、ドイツでもってさかんにエロティッシュな映画を出した時代があるんです。それを見ていて、そこそこがわかんなかったらいいんです(笑)。ほかのことに気をとられて、かんじんなことがわかなくなるって言うんですよ(笑)。

宗像 それだけ、集中して……

大槻 夏の着物を裏返しに着て、ステッキついて散歩して……(笑)

宗像 それは東京ですか。

大槻 東京で。(笑)肩当てのおもてに出して街中歩いたって人ですからね。

宗像 集中されると、頓着なくなってしまうわけですね。

大槻 ちょっと手にふれた着物さえ着てりゃいいんだろって調子でね。裏も表も考えないで。そういう風なところがあり

ました。

宗像 そういう、いろんな分野への関心ということと、それからも一つ感じたことは、臨床的というんでしょつか、学問の狭い領域じゃなくって、ほかの人のいろんな生き方そのものとなげて精神分析学を考えるとところか、大きかった方なんじゃないかなと思うんですけども。

大槻 うちではいつもね、患者さんの相談にあずかるっていうことは、ひとつも書きもしなきゃ言いもしなかったのに、本を読んだ方が、なにか大槻のところへ行けば、自分の苦しみやなんか何とか解明してもらえんじゃないか、と、まあよく来ました。ほんとによく……

宗像 まるで医者さんのように……

大槻 そうなんです。それで、そういうことを扱ったせいで、官学派の方のご機嫌を損じたんだと思うんですよ。だけどもねえ、あの戦争中……戦争中のご存じ？

宗像 いえ、本でしか知らないんです。

大槻 本でしかねえ……学徒出陣なんてあったでしょう。若い方が、大学卒業すると戦場に出なきゃならないんで、そういう方なんか見たんですよ。ご自分の死に対して、なんとか納得を行かせたというて気があったんだと思うんですけどね。そういう方が、ずいぶん、別に何もしたわけじゃないけど、大槻にきいてもらえば、何か自分がわかるんじゃないかっていう、そういう若い方のお気持があったんだと思いますよ。あの時分

の若い方は、気の毒だったですねえ、ほんとに。

宗像 「生きる」と直接つながる学問、という役割ですね。それが、たいへん求められたし、そのことが逆に、官学の方からは煙たがられたということなんでしょう。

大槻 本当に大変です。(笑)いまだに文句があるらしいですよ。こないだ香港大学の人が来て、大槻の仕事これだけやったのに日本ではわりに認められないのはどういうわけかって言って、全部著書をお読みになって、そして大槻の伝記みたいなものを、あの学説みたいなものを書こうと思って、香港で出すことになっていたんですけど、これ言っているんだか悪いんだかわからないんですけどもね、日本の方から文句が出たんですよ。そういう著書を出されては困るっていう意味でしょうね。

宗像 むしろ、これからんじゃないでしょうか。学際的な広い視野と、生きる場とつながってくる学問というのは、これからますます求められてくるでしょうし、そういう必要性が……

大槻 必要性があるんですけどね、でも、その香港大学の先生おっしゃってましたけどね。ここまでいらしたんです、ええ。日本ではどうかって。分析学はどうか。今の若い人は、苦勞して分析学なんか、自分で病気を治そうなんて気持なくて、気楽に、そのときが楽しけりゃいいという調子でなさるから、分析がそれほどまじめに扱われているかどうかわかりません

よっておっしゃいました。香港でもそうですって。それで犯罪が多いんだ、って。

宗像 残念なことですね、本当に。

大槻 なんだか、世の中変わった、みたいな調子ですねえ。

高村光太郎と智恵子

宗像 そういうお仕事を、動坂のお宅、精神分析学研究所を拠点にして、とくに戦前はなさっていたわけですが、私は近代文学の勉強をしているものだから、本郷・駒込の界隈といますと、とくに動坂とか、団子坂とかですね……

大槻 団子坂、鷗外さん。(笑)

宗像 鷗外のところとかですね、団子坂や駒込界隈は、近代文学と非常に縁が深いところなものですから……。動坂のあたりに長くお住まいになっていて、いろいろと文学者たちとの交流もおありになったとうかがっているんで、ぜひ、そのお話もつかえればと思っっているんですけども。

大槻 あの、高村さんの近くでね、智恵子さんが亡くなる前に私おつきあひしてたんですけどね。うちの雑誌ね、ここに「精神分析」(注・昭和八年に東京精神分析学研究所から創刊)合本がありますけど、それを高村さんも読んで下すって……

宗像 あ、やっぱり読んでたんですね、光太郎も。

大槻 ええそうですね。……大槻さんともうちよっと早くつきあっていたら、智恵子をごんなことになくても済んだん

だ、って。よく私の家にもお寄り下さいますね。つくづくそう言っただけでした。

宗像 駒込にアトリエがあったわけですね。光太郎のアトリエが。

大槻 そうなんです。みんな化け物小屋だなんて言っていました。

宗像 アトリエってぶつう明るい感じがするはずですよ。

大槻 道の向こう側から光線が入ったんですかね。で、通りの方は閉め切っていましたからね。本当にそんな感じでした。

宗像 化け物小屋ですか。

大槻 ええ、化け物屋敷だなんて……あそこ千駄木小学校っていうのがございまして、あの近くに。生徒たちみんなそう言っただけでしたね。うちの息子もあそこ、千駄木小学校出たんですけど。

宗像 いつもその光太郎のアトリエの前を通られるわけですね。

大槻 そうです。そうやって学校通ってました。私は、動坂の途中、下から上がって行って右へ折れたところに居りました。高村さんとうかがいますとね、応接間に、智恵子夫人が臨終の前に描いた切り絵、あれがずっとかけてありましてね、高村さんがいちいち説明して下さいましたよ。

宗像 そうですか。あれはたしか、昭和十四年の十月ですね、智恵子さんが亡くなったのは。

大槻 ああ、そうですね。
宗像 十四年ですね。そうすると、晩年の智恵子や光太郎のことを、よくご存じなわけですね。
大槻 智恵子夫人のことは、高村光太郎さんにかがいました。

宗像 そうですか。
大槻 亡くなる二日ぐらい前から、完全に正気に戻ったんですって。

宗像 南品川のゼームズ坂病院というところに入院していたと思うんですけど。

大槻 そして、レモンが食べたいレモンが食べたいと言って、レモンを買って来たら、それを切り絵をなさって、それが済んでから召し上がられたそうですね。

宗像 そうですか。私たちも写真などで智恵子のつくった切り絵をときどき見ますけれども。

大槻 みごとなもんですよ。

宗像 ええ。
大槻 お膳に鰯なんか出ますとね、その鰯を見て切り絵をつくって、そしてそれが済まないうちは食事なさらない。

宗像 切り絵を完成させてからでない……

大槻 ええ。それから、ご飯にとりかかったんで、時間がかかったらしゅっごさいますよ。

宗像 そうですか。

大槻 だけどね、智恵子夫人があんな風になったのはね、大槻や大槻のお弟子さん方が研究したんですけれどね、智恵子夫人が若いころ、山でころんで、失神するぐらいの怪我、頭を打って、怪我をなさったんですって。きっとそれが原因だろうって、うちではそう申しておりました。

宗像 実家が破産されたり、いろんな原因をいわれることがありますね。

大槻 ええ、それはかりじゃなく……とにかく、あれ、皆さんわりあいにのんきに考えてますけれどね、頭を、きつく打って、失神するほどの怪我をなさると、後年にとても影響が。

宗像 その話は初めてうかがいました。

大槻 それから、出産時にもね。お産が難産だと、思春期になつてやっぱり神経症になる事態が多いらしいですよ。大槻がたくさん患者さんを取り扱ってみての経験ですけどね。

宗像 そうですか。大槻先生に早く会ってれば、というさっきのお話は大変印象的です。

大槻 それともうひとつ、これも大槻が言ったことなんですけれど、高村さん、若い時分に、ずいぶんお遊びに（笑）……ご存じでしょ、それは。

宗像 そうですね（笑）。

大槻 あちこち通われて、ねえ。なんかまっとうな生活でもなかったんで、それがお父さん（注・彫刻家高村光雲）との、あまりいい関係にはならなかったということもあるんですよ。

それで、智恵子さんが、まるで、聖処女のような人だったらいいんですね。それで高村さんが、あんまりたてまつっちゃったあれが悪かった、もう少し人間並みにあつかえば、あんなにひどくならないでも済んだんだ、って、うちでそう言っていましたね。

宗像 たしかに、「智恵子に会って自分の存在が救われた」という言い方をよくしていますね。

大槻 ええ。高村さんて方は、いい方なんですけれどねえ、ほんとに。拝見したところもね。私いつもおそばにいてお話うかがったりもしましたけどね。高村さん自身が、やっぱりすこし。宗像 芸術家ですからね。そんな側面もあるでしょうけれども。

長井（壁のレリーフを指さし）高村さんに描いていただいたフロイトのレリーフが。

宗像 ああ、これが高村光太郎がつくったレリーフですか。

大槻 そうです。

宗像 高村さんと交際をはじめられるきっかけは？

大槻 どこか会合で会って、ああ、近くに住んでる、っていうんで、往き来するようになったんじゃないでしょうかねえ。

宗像 それで、こういうレリーフも、つくっていたかどうかのようなことになったわけですね。

大槻 あ、そうですね。その、つくり主が、岩倉公爵（注・岩倉具栄）です。岩倉公爵の家庭のね、顧問みたいなことをし

ておりましたもんですから。その子供さんの成長を見たり、英語の教師、大槻が教えたり。あの方（注・岩倉具栄の長男具忠、イタリーの公使館につとめてらしたんですよ）。

宗像 それは、知りませんでした。

大槻 ええ、一番上の坊ちゃんね。その方を見たり。それで、何か肩入れして下すって。

宗像 光太郎の作品というと、大変貴重なレリーフですね。

大槻 そうみたいです。

宗像 智恵子が亡くなられたあとで、「智恵子抄」なども読みになられましたか。

大槻 ……ちょっとただごとじゃないような感じも受けますけどね。……高村さんが、買い物籠の中に大根だのネギだの入れてね。買い物をして、気の毒に思いましたよ。

宗像 なるほど。芸術家らしく外側のことなんかは構わないような人でしたか。

大槻 うん。正直な方なんです。私もこの歳になってそれがだんだんわかってきたんです。あのときは、すこし変だなと（笑）思ってたんですよ、若い時はね。ですけど考えてみますと、正直な性格の方だと思いますよ。

宗像 でもまあそういう夫婦のあり方っていうのは、なかなかないですよ。

大槻 うーん、両方変わってないと（笑）ないでしょうね。まあ、ずけずけ物を申しまして相すみません。

宗像 いいえとんでもない(笑)。

大槻 年寄りですから、まあ、おゆるしいたいて、思ったとおりのことを言わしていただきませうけども……分析学なんかやりませうね、ちよっと、普通の方と価値観がちがってくるんです。自分でも持て余すくらい(笑)、価値観がちがってきませうから。

宗像 ああ、普通の人があまり見ないものを、ご覧になるんでしょうしねえ。

大槻 三島由紀夫の……あの人は猛烈な同性愛だったでしょう。ご存じですね。あの同性愛の相手になった人を治したことありますけどね、ここへよく来て。もう、どういうわけですか、奥さんもすわって聞いて下さい、って、おっしゃるんですよね皆さん。それだもんですから、私だって聞いたってしようがないんですけどね、まあだまって座ってました。……でも、人間って複雑なもんです。

宗像 うーん。その、複雑なところが、精神分析の対象になるわけですから……。智恵子のふるさとの二本松は、私の出身の郡山市の隣の町なんです。ですから、生家に行ったり、安達太良山に登ったこともあって、愛着があるものですから。いま実際にお話をうかがって、大変……

大槻 話おもしろいですか？

宗像 ええ、とても。

森鷗外と茉莉

宗像 いま、高村光太郎・智恵子の話をうかがっていただいてくれども、そのほかにも、あの界限には、いろいろな文学者が居りましたですね。

大槻 鷗外さん？

宗像 鷗外もそうですね。

大槻 鷗外さんが亡くなってから私お知り合いになったんです。あの、茉莉さんっていうお嬢さんが私とおつかつた……

宗像 同じどしぐらいでいらっしやいますか。

大槻 いや、茉莉さんの方が少し上。あの、茉莉さんは何でもおっしゃるの(笑)。すいぶんとね、おっしゃるもんで、内部事情なんか私うかがってますけどね、しゃべっていいもんだか悪いもんだか、私にはわかんないんですよ(笑)。

宗像 茉莉さん自身も、お父さんの鷗外のことはいろいろ書いていますけれど……

大槻 ええ、私も書いたの。雑誌に私書いたことありますよ。

宗像 あ、そうでしたか。それはまだ拝見してませんでしたが、こんどぜひ楽しみに。

大槻 あの、鷗外さんの友達っていうのはね、鷗外さんがああいっ、社会的に名声の高い人だったでしょう。そうすると家庭生活の中でも、何でも、欠点のないような人に書くのは、あれは大間違いですよ(笑)。

宗像 大間違いですか(笑)。森茉莉さんは、お父さんのこともお話しになっていたんですか。

大槻 茉莉さんはもう、お父さんに可愛がられて、まったく文句なしだったんでしょうけどね。その可愛がり方だね、自分から手放したいきさつだね。鷗外さんが、十七でお嫁にあげちゃったんですね。あの、フランス文学の山田珠樹さん。

宗像 はい。

大槻 私、どうしても鷗外さんの気持がどうなんだかわかんないんですけどね。十七で茉莉さん手放したの。お弟子さんの中の一人が山田珠樹さんだったでしょ。そしたら山田珠樹さんが、鷗外さんのところへききに行っただんで。その、茉莉さんと結婚して、初夜にはどういふうに扱っただらいいかってききに行っただんで。そうやって茉莉さんがお嫁に行っただでしょ。そしたらその先にね、鷗外さんがご存じなかったんだかわかんないんですけどね、山田珠樹さんと女中さんの間に生れた男の子がいたんですって。だから、茉莉さんが言うのはね、「それが憎い」って言うんです。そりや間違いがあっていうことは仕方がないけれど、わざわざ父のところに来てね、どう扱っただらいいかなんてききに行く、それが憎いっておっしゃいましたよ。

宗像 そうですが。たしか一年ぐらいで別れてしまいましたね。

大槻 そうですよ。

宗像 じゃ、ちよっと真面目ぶっていた、純情ぶっていたということなんですかね。

大槻 だから鷗外さん、ご存じなかったんですかねえ。わかっててもお遣りになったんだか、私そのへんのことわかりませうけどね。

宗像 でもほんとに、目の中に入れても痛くないほど……

大槻 いやもう可愛がって。夜、仕事してるでしょ。そうすると鷗外さんがむこうで、この後ろに寝かしといたんで、茉莉さんを、ほんとに手放さないような感じだったですよ。あの、妹さんに杏奴さんて方でしたよ。あれが、あの小堀遠州の子孫(注・洋画家小堀四郎)のところへお嫁にいらしたの。あんまり綺麗じゃないって言ってあんまり可愛がらなかった。

宗像 そうですか。

大槻 だから、どうして鷗外さんほどの人がね、容貌だけで可愛がったり可愛がらなかつたりしたんだか私にもよくわからないんですけど。あれきつと、若いとき外国行って、日本の女にくらべて外国人がとっても美人に見えたんでしょうね(笑)。作品見ても、「文づかい」とかあるでしょ。うぬぼれもいところだと私は思うんですけどね。

宗像 茉莉さんたちの名前もそうですね。茉莉とか杏奴とかね。外国でも通用する名前というので、つけたんですね。

大槻 みんな。一番上の方は何て言いましたっけ。
兼築 於菟さん。

大槻 ああ、オットーさんね。あれが、赤松男爵のお嬢さんとの間に生まれた長男なんですね。

宗像 ええ。最初の奥さんとの間に生まれた。

大槻 茉莉さんのいうところによりますとね、於菟さんのお嫁さんを探すのにね、とにかく綺麗じゃなくちゃいけない。そして、とっても綺麗だったそうですね、最初のお嫁さんね。だけど、食事なんかしても、すっかり食べるようにちゃんとしつらえても、着つける気がないようなところがあった。とっても綺麗な人だったそうですね、だけど別れておしまいになったの。

與謝野晶子の迫力

大槻 杏奴さんが小堀さんと結婚したときにお茶会があったの。私が大槻と一緒によばれて行きましたら、そのところに、歌人の、えー……

長井 與謝野晶子。

大槻 ああそう。與謝野晶子。與謝野さんも来てらっしゃいました。すごいです、迫力が。今思ってもすごい方だと思うわ。ずいぶん大変な女の子さん……

宗像 たしか十人くらいお子さんがいました。

大槻 それでまあ、いろいろ、いきさつがあって、鐵幹さんと結婚して、鐵幹さんの奥さん追い出しちゃった。

宗像 そうですね。先妻との間にはお子さんもいましたけどね。やっぱりそういう迫力が感じられましたか。

大槻 ええ。

宗像 本当にあの方はエネルギーですね、今見ても、仕事が。

大槻 そうなんです。いや、もう私、おそれをなしたんです。私は若かったですからね。ああ、與謝野晶子ってこういう人だったかと思って、あの、歌がナマですよ。私はあれが厭なだけども。

宗像 いま、歌のことで思い出しましたが、奥様も歌をおつきりになっていらっしやって、冬の虹」という歌集をお持ちですね。

大槻 ええ、あら、ご存じ？

宗像 はい。今のお話だと、別に與謝野晶子の影響を受けてということではないですね。

大槻 そんなことはないです。

宗像 そうですか（笑）。でもやっぱり、以前から……

大槻 若い時から。ひとりでの歌をやるようになったんです。先生につかないで。一度先生についたら、どうしても意に沿わない直し方をされたので、一度でやめちゃったんです。

宗像 それは、まだ若い頃ですか。

大槻 はあ、若い頃。わたくしはね、女学校二年の時に結核をわずらいましてね。あの時分の結核という、追い出されちゃう。そのあと、もうだいぶよくなってから、他の学校に行きたいって言っても、もう親がおそれをなしちゃって、お裁縫でも

習う一年制の学校なら入れてやるけど、他の、むずかしいこと

言う学校はダメだ、ってことになっちゃって、泣く泣くお裁縫なんかやらせられましたよ。

宗像 で、歌はずっと続けていらした。

大槻 歌は、もうほんとに誰に教わったんでもないんです。だから変な歌があると思います。

宗像 大槻先生も晩年に歌をつくられていますが、奥様の影響でしょうか。

大槻 何でしょうかねえ。大槻は少し学問がありすぎるもんだから、歌がむずかしいんですよ（笑）。

平塚らいてう

宗像 そうですか。……與謝野晶子もそうですね、さっきの智恵子も「青鞥」の運動に加わりました。ああいう「新しい女」というか、「青鞥」は、奥様からご覧になっていて、もう少し世代としては下だと思えますけど、いかがでしたか。

大槻 いや、私はね、自分の体が悪かったもんですから、威勢のいいことにはあまり向かなかったんですよ。やっぱりね、病人でしたからね。

宗像 かなり華々しいなあという感じはされましたか。

大槻 あの、雷鳥さんのこと？ うーん、あんまり縁があるとは思えなかった。私、はじめ、あとでおつきあいするようになってから、ちょっと、ほんとにそうだったのかしらんと思う

ほど、お淑やかな奥様になっていらっしやいました。
宗像 おつきあいが始まったのはいつごろからのことなんでしょうか。

大槻 何でそうなったんだか私たちにも、はじめのほうはよくわからないんです。気が合うからあちらでいらして下さったんだか、こちらでうかがうようになったんだか、なんだかそのへんのことにはよくわからないんですけどね。

宗像 やはりお宅へ雷鳥も……

大槻 いえ、雷鳥さんはうちへは見えなかつたけども、私が雷鳥さんをお訪ねしてから、二度ほどうかがいましたかね。

宗像 そうですか。

大槻 ご存じですよ、「若きツバメ」とか言って大騒ぎになって（笑）……

宗像 ええ。でも晩年は、家庭を守るようなかたちで。

大槻 そうですねえ、若い時は男装してね。男装したでしょ？ 森田草平さんと、塩原山へ心中しそなったといっつのは、ご存じですよ。あの新聞小説を、森田さんが書いて、それで雷鳥女史が怒って……考えてみるとね、あんな噂ほどでもなくて、雷鳥女史がとも男性コンプレックスが強かった、だから、森田草平さんを友達あつかいにしてただけで、それで遊びにきたのを、森田さんがうめばれたかどうかしやあって、小説作品にしちゃったんじゃないかって（笑）、そういうふうに思いますよ。ええ。みんな面白がって騒ぎましたけどね。

宗像 そのようですね。その後で、画家の奥村博史と一緒に
なつて……

大槻 ああ奥村さん。奥村さんとは私も親しくしました。
宗像 奥村さんという方は、「若いツバメ」といわれたわけで
すけど、どういう方だったんですか。

大槻 そうね、背の高いね、つまり、カッコいい方でしたよ。
宗像 ああ、そうですね。

大槻 ええ、それで、帽子のデザインや何かに、婦人帽の。
私、つくっていただきました。それから指輪のデザインをして。
二つばかりつくってもらいましたね、そういうこと、優しい方。

宗像 たしか病気をして、雷鳥が看病したんですね。

大槻 あ、そうですね。ふうん……ああ、そういうことがあつ
てね。

宗像 ええ。さっきの光太郎智恵子もそうですね、雷鳥と
奥村さんという組み合わせも、なかなか不思議な組み合わせで
すね、それぞれ。

大槻 不思議な組み合わせですけど、やっぱり縁があつた
んですね。

武者小路実篤

大槻 どういうわけだか、奥村さんとはちよつと縁があり
ましてね。あの……（笑）それから武者小路さんの話に飛ぶん
ですけどね。

（笑）

宗像 見ただけで（笑）。出しただけ。

大槻 ええ。あるにはあるんだぞ、だけど、税金なんかじゃ
ない使いみちが他にあるんだぞ、っていうこと。あの時分あ
んなことする人へんですよ。税務署なんて鬼みたいにこわがら
れてたでしょ。

宗像 ええ。

大槻 なんだか、一つ話。でもその時分、私、若かったです
からね、ほんとに変な人だと思ってたんです。でも、変な人いっ
ぱいいますからね。

宗像 買い出しの時は、服装なんかもかなり……。

大槻 そう、そう。なんだか、知らないで見れば、ごく素朴
な方のようにお見受けしますね。

宗像 スマートな奥村さんと、素朴な武者さんが一緒にい
たわけですね。

大槻 そうなんです。

宗像 面白いですね。

大槻 あの（笑）、まったくねえ、ほんとに……奥村さん背
が高いでしょ、武者さん低いでしょ。

宗像 で、並んでいるわけですね。

大槻 そう、あの、吊り革につかまって（笑）。それで、そ
のとき紹介していただいて。それと、その税務署の話聞いたの
が、私がなまで聞いた話です。

宗像 それはぜひうかがいたいですね。

大槻 いいですか？ 戦争たけなわの時分に、食糧難ってこ
とご存じ？ それで、みんな、買い出しに行きましたよね。そ
の省線電車の中で、奥村さんと、武者さんと、あの（リュック
を）しよって、買い出しに行つた帰りだつて言つて。そのとき
に私ははじめて紹介されました。

宗像 ほか。お二人で同じところへ行かれたんでしょうか
ね。

大槻 ええ、買い出しに一緒に行かれたんでしょう。武者さ
ん、どんな方だと思つて？（笑）

宗像 文章そのものは、非常に天真爛漫としている文章です。
大槻 うーん、その天真爛漫なんです。ええ、いまの十六
七とちがつて、むかしの十六、七の子どもの感じですよ。素朴な
人を疑うなんてことはあんまり、知らないような方でしたね。

私は、そうお見つけしたんです、ええ。そうしましたらね、私
の知り合いの、池田書店っていう大槻の本をよく出しました女
社長の方と話してるときにね、その池田さんが、武者さんつて
人は、へんな、変わった人ですね、つて。何です、つて言つた
ら、ある日税務署に行つて、武者さん自分で行つたんですよ。

そして財布からお金出して、払つべき税金を全部並べて、いま
お金があつて税金を払い込んだけれども、自分には本当に買
いたい本があつて、この機会をのがすと買えなくなるから、そつ
ちの方へ回す、つて言つてまたお金を財布の中に入れちゃつた

宗像 ええ。納税の義務は忘れていないけれども、今はそれ
どころではないということですね。

大槻 買いたい本があるんだ、とこつというわけなんです。ね。
税務署の人びつくりしてね（笑）、なにも言えなかつたそつで
すよ。

宗像 そうでしょうねえ。武者小路実篤つて人は、日本の文
学者の中ではめずらしいくらい、明るいい感じがする人ですけど
……

大槻 あの人の……そうですね……あまり、苦勞を知らなかつたん
じゃないんでしょうかねえ。お家柄がお家柄ですからね。そつ
じやなかつたかと思えますよ。

宗像 そうですね。

大槻 でも、あの時分は良かったですよ。ええ。そういう人が
いて面白かつた。いまみたいにねえ、もつ抜け目がなくて（笑）
……あなた方のことを言つてるわけじゃありませんよ（笑）。

松下 抜け目ありますよ。

大槻 抜けたところもおありになるでしょ、考えてみれば。

松下 そりゃそうですね。

大槻 そう、私たちだつて、みんなそれこそ、みんなてんで
に多少抜けてるところあるんですよ。

松下 当然ですよ。

宗像 で、そういう人たちが、おのずからお知り合いになら
れて、交際があつて、というところが興味深いですね。

大槻 そうなんです。だから大槻も少々（笑）、その、やっぱり抜けたところがあった。私もそうですけどね。だと思いませんよ、そういうところが友を呼んだんじゃないでしょうか。お互いにその抜けたところを許し合って、つきあっていられた時代なんですね。そういう時代だったんですね。

大槻憲一と文学

宗像 大槻先生ご自身も、はじめはいわゆる文学青年で……

大槻 そうです。

宗像 ずっと、精神分析の仕事をするかたわら、文学に対する関心をお持ちだったんですか。

大槻 ああ、あつたみたいですねえ。

宗像 それが、映画なんかにも……

大槻 そうですね。ええ。

長井 訳文がありましたよね。

宗像 若い頃のね。

長井 外国の人の全集を訳したのは何でしたっけ。

大槻 グローチエ？

長井 えーと、近代文学館にあるって言うてた……

宗像 ウィリアム・モリスですかねえ。

大槻 ああ、おじいちゃんが、若いとき心酔したのはウィリアム・モリス。

長井 そう、そう。それを訳した本が。

大槻（壁に飾った額を指さし）その絵は、モリスの末のお嬢さんが贈ってくれたんです。その、絵です。壁紙。手紙が入ってます。

長井 ウィリアム・モリスだけじゃなくて、誰だったでしょうか。文学者でいたでしょう。

宗像 ドイツの方ですかねえ。

長井 ええ、そうですね、すごく有名な人です。

宗像 シュニッツラーの訳本もありましたね、確か。

長井 ウィリアム・モリスは、でも小説家じゃないですけど、原画を送ってもらったみたいですよ。

宗像 ああ、そうですね。美術というか、芸術の方面ですよ。ね。

大槻 そうですねえ。

長井 祖父はあの芸大にも行ってましたので……

宗像 そうですね、ご自分でも……最初は文学というよりも、絵だったんですね。

大槻 絵だったんですよ。絵が好きだったんです。途中まで絵をやるうか文学の方をやるうか迷っていたらしいんですよ。

宗像 芸大にも行かれて、一時。

大槻 ええ。そして途中で早稲田へ転入しますから。

宗像 それで文学の方面に移られたわけですね。

大槻 それと、心理学と……

宗像 ええ、心理学の方へまた……

大槻 だけどやっぱり、文学と関係のある仕事、でしょうね。宗像 人間の内面を見つめるということには、そういうところからも来ているんでしょうね。早稲田の批評家で、長谷川天渓との仕事もいくつか、ご一緒の訳本もありますね。

大槻 ああ、天溪さんね。私は天溪さんになんべんかお会いして……

宗像 先生の学校時代、直接習われたんでしょうか。

大槻 そうでしょうね、「先生」だったですね。

宗像 奥様もお会いになったことがあるんですか。

大槻 ええ、何べんか（鴨居の上を指さす）ここにシエークスピアの墓碑銘あるでしょ。あれは長谷川天溪さんが、あつち行かれたときのお土産。

宗像 これシエークスピアの、ですか。

大槻 墓碑銘。

長井 ほんとの拓本みたいですよ。本物の拓本。

大槻 あのコピーじゃなくて実際。

兼築 原拓、原拓。

宗像 これは長谷川先生から……

大槻 うん。お土産にいただいた。

宗像 そうそう、たしか晩年にシエークスピアのご本が、大槻先生にありましたね。一番最後の頃だったと思いますけど。

大槻 そうです、シエークスピア関係の。あれ私が読んで面白かった。ご覧下さいました？

宗像 ええ、最後に近い時期のお仕事で、またシエークスピアのようなものをとりあげられるのは、面白いなあと思います。

大槻 シエークスピアにはとつても感心して、心服してたよつですよ。「ほんとの心理学者だ」って言うてました。

宗像 そうですか、シエークスピアがそんなにお好きでいらして……

大槻 大好きでしたね。感心してました。だからきつと、晩年にあの、シエークスピアの本出したんでしょう。

宗像 だいたい、先生の書かれるものは、奥様もほとんどお読みになられるんですか。

大槻 ええ、校正してましたから。

宗像 ああ、校正、添削とか批評もなさるんですか。

大槻 わたくしが？ いやそんなことはできませんよ。

宗像 そうですか（笑）。

大槻 翻訳の言葉にまつたとき、こういう意味なんだけど、日本語でどういふ表現がいいかっていうこと訊かれて、自分の考えていることを言ったことはありますよ。

宗像 ああ、そうですね。

大槻 ですが、主人の仕事に私全然文句言いませんでしたから。

宗像 戦後は、本を、ずいぶんたくさんお出しになられましたから、ほんとに執筆でお忙しい毎日だったんでしょうね。

大槻 そうです。ほんとうにまあ朝から晩までわりこんでその間に訪問客があるでしょ。その、自分の気持ちを聞いてほしいとか、そのような人がずいぶん来ましたから、ずいぶん忙しい……静かだけど忙しい生活でした。

宗像 人の心の底を考えるとこういうお仕事だから大変でしょうね。

大槻 いやあ、もう大変ですよ。で、そういう方、自分のことばかり考えて、相手の都合なんか考えないですからね、ここまで、遠いところから突然飛びこんでいらしたりしてね。

宗像 それだけ求められていた、ということでしょうね。そういうところが、いろんな文学者を周りにひきつけることにもなったんでしょうね。

大槻 無口な人でしたけど、ほんとに。

江戸川乱歩の書齋

宗像 話は変わりますが、江戸川乱歩という人も、ご交際があたりでしたか。

大槻 ああ、そうです。

宗像 あの人もたしか早稲田の人ですね。

大槻 早稲田です。

宗像 ええ。政経の出身だと思います。同じ頃ですかね、大槻先生と。少し前かもしれませんが……

大槻 ああ、そうですか。よく、出した本を下さいましたよ。

宗像 そうですか。

大槻 誰が持ってた（笑）。

宗像（笑）江戸川乱歩の探偵小説を見ますと、人間の心理のこまかいところを覗き込むところがありますから、大槻先生の心理学とか精神分析と響き合うところがあったのかな、と思うんですが。

大槻 そうですね、江戸川乱歩さんはきつと、ただの探偵小説家で終わりたくなかったんでしょうね。で、分析学勉強したっていう気持があたりになったでしょ。そっちに（書棚を指さす）、江戸川乱歩さんの執筆した文章も載ってますよ。

宗像 よろしいですか（雑誌「精神分析」の合冊本を手にとり開く）。貴重なものを申し訳ありません。昭和八年の「精神分析」の創刊号ですね。

大槻 はい。

宗像 そうですね。大槻先生の文章が巻頭にあって、長谷川天溪、江戸川乱歩、それからシモンズ……これは（一）と書かれてありますから、（頁をめくる）連載ですね。

大槻 それが戦争でね、やめさせられたんですよ。あの時分こんな雑誌出したのは、まったく、極楽とんぼみたいにいれましたから、非難されました、だから……。

宗像 乱歩という人は、どういう感じの人でしたか。これもまた変わり者のような感じですけども（笑）。

大槻 言っちゃ悪い（笑）。なんかこう……私が若かったから、

あんなふうに感じたのかもわかりませんがねえ、んー、すこし……一番似てるって言えば、なんか海坊主みたいな感じ（笑）。

宗像 あー（笑）。頭も、坊主頭でしたかね。

大槻 ええ、そう。そして、顔立ちの大きい。私、乱歩さんとこへ一度、行ったんですよ。取材に行ったんですけど、暗い書齋に、書棚がだーっと並んで、そのなかに金箔で押した外国の本なんか、いっぱい、ぎっしり。立派な本がねえ。前に大きな、これより大きいテーブルがあって、そこへ座らせられて、その本棚の前へ乱歩さんが座って、さて、というときに私、あがってしまいました（笑）。まったく若かったですよねえ。

宗像 取材というのは、この雑誌（「精神分析」）の取材ですか。

大槻 ええ、そうですね。それに、行ってこいって言われて、行ったんですけどね。すっかりあがっちゃいましたね……そのところ、気味のわるいような感じがあったもんですからね。何を話してんだか、自分でわかかんない（笑）。

宗像 聞き書きのようなことをなさったんですか。

大槻 そうなんです。けどほんとに、字も忘れてしまうくらいあがっちゃって（笑）。

宗像 異様な雰囲気を書齋だったわけですね。

大槻 そうなんです。

宗像 真つ暗……？

大槻 うす暗い。うす暗くてね、あかりもついてなくてね。もうほんとに私あんなにあがったことないですよ、どちらへうかがっても。あのときは気味が悪かったですね。

宗像 もう、書齋の雰囲気そのものが？

大槻 ええそうですね。で、こんな雑然としたものが置いてなくて、その金箔を押ししたような立派な本がぜんぶ並んでしょ後ろに。

宗像 吞まれてしまいますねえ、それは。

大槻 吞まれる、っていうんじゃないで、何て……ああ、とにかく異様な空気でしたよ、私にとつては。他の方にとつては、どうだかわからないですけど。

宗像 さっきうかがった、武者小路さんのような明るさとは対照的ですね。

大槻 そうなんですよね。

宗像 そうすると、乱歩の方がむしろ精神分析などに深い関心を持っています……

大槻 ええ、そうですね。ひとつは、探偵小説に分析学でも応用して、新機軸を開こうっていう、そういう気持もあつたと思うんですね。

宗像 ええ。

大槻 でもみんな、あの戦争で、おつきあいも何もバラバラになっちゃいました。

宗像 戦争前の時期に、さまざまな方との交際が……
大槻 そうですねえ。みんなそれぞれ、逃げ回って、疎開していなかへ行って、そこで亡くなった方もあるし、本当に大変な時代でしたよ。
宗像 動坂においてになったのは、かなり長いあいだでしたね。

大槻 ええ、相当長く。
宗像 そうするとその間に、いまうかがったようないろんな交際がおりになつたわけですね。
大槻 そうですね、はい。

(小休止)

泉鏡花の印象

奥村 いま、この絵を見て……(壁に飾ってある大槻憲二筆の大槻夫人像を指さす)

大槻 私の若い頃、モデル料がないもんですから、私を……いまから何年前でしょうかね。

宗像 ご結婚間もない頃の……

大槻 いやそうでもないですよ。上の子どもが五才ぐらいのときですから……だから、私は二十一か二で結婚しましたからね、二十五、六じゃなかったかと……

宗像 ああ、そうですね。……お疲れでなければもうちょっと

と、おうかがいできればと。

大槻 ああ、どうぞ。

宗像 光太郎・智恵子ですね、それから森鷗外、茉莉さん……それから、えーと江戸川乱歩なども含めてお話うかがったんですが、そのほかに、印象に残っている方、というところでしょうか。

長井 泉鏡花さん……

宗像 泉鏡花。ああ。

大槻 泉鏡花さんどんな方だと思う？ あの、作品から推して考えると、どんな風な人だと思いいになりますか。

宗像 大変な潔癖性だという話を聞いたことがありますけれども、わりと小柄な方でしょうかね。

大槻 そうなんです。私は、お送りしてねえ、あの、和服の外套をこう着せ掛けた覚えがあるから、男の方にしては、小柄ですね。

宗像 それはいつごろのお話でしょうか。

大槻 私が二十……五六……

宗像 何か、会でも？

大槻 ええ、会があつて、大槻がそれを世話しておりましたので、私もかりだされて、行ったら、泉鏡花さんだつて聞いた隣に座る人がないんです、おそれをなしちゃつて(笑)。で、席が空いちやつた。それで、しょうがないから私がそこへ座つたんですけどね。うん、あのね、そうですね、わりと女性的な

方ね、きつと。男の方にしては、背があまり大きくないです。だけどねえ、とても、眼差しは優しい方でした。

宗像 よくお話されるほうの方ですか。それとも、あまり話をしない……

大槻 私と初対面だし、私も少々おそれをなしておりますからね、だから、先生の愛読者とも言いかねて、ただ普通の「挨拶だけ」にしましたけどね。

宗像 泉鏡花のものはずいぶん読まれていたんですか。

大槻 読みましたよ。泉鏡花の作品なんてのは、現実を忘れるのに本当に都合のいい作品ですね。だからきつと、若い時にいろいろあつて、のめり込んだんじゃないでしょうか。

宗像 「婦系図」なんかもお読みになられた。

大槻 全集を読みました。

宗像 ああそうですね。そのころは、泉鏡花というともう大家といふ……

大槻 そうでしよう、大家でしよう。きつとそうだと思えますよ。でも、眼差しは本当に優しい、こつ、女性的な方でしたね。おや、と思つほど。

宗像 あの作品の世界は独特ですよな。

大槻 そうなんですよね。

宗像 この現実世界を忘れさせるような……

大槻 そうです。そういう魅力がある。

宗像 魅力がある。で、人としての泉鏡花にもそういう雰囲気

気があつて……

大槻 そうですねえ。

宗像 和服……ですか、やっぱり。

大槻 和服で、ええ。

宗像 お洒落な感じですか。

大槻 ええそうですね、お洒落な感じでしたね、こつ、身ざれいな。

宗像 ああそうですね。非常に潔癖性だったという話が伝わっていますが。いまのお話から風貌というか、様子が思い浮かぶようですね。そういう会がわりあいたくさんあつてお会いになつた文学者も多いんでしょうね。

大槻 そうですねえ。なんか一々覚えていられないんですけどねえ。わりと大槻の関係した会なんていうのは、皆さん真面目でございましてね。そして、ほかの作家みたいに、乱痴気騒ぎに終わるなんてことはなかったです。

宗像 心理学と文学と、人間を見つめる、人の心を探っていくという点で共通点もあるでしょうから、そういう点で交流もあつたんでしょうかね。

大槻 うーん、どうしてだかわかんないんですけどね。

児童文学者たち

宗像 児童文学の作家たちも、交際があつたとうかがいますが……

大槻 ああ、あれはね、有名な児童文学の人。

長井 浜田さんじゃないの。

大槻 うん、浜田さん。浜田広介さんだの、それから……

長井 坪田さん。

大槻 ん？ だれ？

長井 坪田譲治さん。

大槻 ああ、ツボタさん。

長井 それとあの水谷さんでしょ。

大槻 あ、水谷まさるさんね。あの方々と、おつきあいありまして、よくお見えになりました。

宗像 児童文学の方との取り合わせというのは不思議な感じもしますけれども。

大槻 うーん……だけど、やっぱり、子供のこと、ひとは大切に思ったんではないでしょうかね。やっぱり、子供の時分からの影響がいろいろあるから。

宗像 ええ。

長井 坪田譲治さんが、あの「びわの実学校」という機関誌を出していて、それとその祖父の「精神分析」の本を交換していたんで。

宗像 やっぱり児童文学の方は、他の文学者や芸術家たちと感じのちがうところはありますか。

大槻 うん、そりゃありますよ。浜田広介さんがどっかに書いてたんですけど、自分が児童文学をやるようになったのは、

大槻憲二がね、児童文学だっていいんだから、大切なんだから別に児童文学やってるからって気が引けることもないだろう、って言って、それから、本気になって児童文学やるようになったって、どっかに書いてましたよ。

宗像 大槻先生がそういう風におっしゃったのは、子どもを見つめることの重要性を考えてらっしゃったんですか。

大槻 そうなんですなえ、まあたぶん、きつと、大槻は人間に興味があつたんじゃないでしょうか。

宗像 ええ。最初につかがつた官学の話じゃありませんけども、児童文学も文学の世界では脇に置かれているようなところがあるから、そういうことに対する共感もあつたんでしょうね。

大槻 そうなんですようねえ。

焼跡の高村光太郎

宗像 長い時間お話をうかがっていて、非常によくご記憶になつていて、驚いてしまふんですけれども。

大槻 いや、余計なことまで覚えていて（笑）、困っちゃいますよ。このへんでね、すっかり忘却してしまつたら、さぞかし気楽だろうと思います。

宗像 いいえ（笑）。何か、鮮明に憶えていらっしゃる秘訣はあるんでしょうか。

大槻 憶えてようと思つて憶えてたわけじゃないんですけどね。

宗像 ええ（笑）。印象がたいへん強かつた、というか強い

印象を受けるような感受性というのを、お持ちだつたんでしょ。うね。

大槻 それもそうですけど、反面、相当間が抜けてたんじゃないでしょうか（笑）。自分でそう思いますよ。

宗像 おつきあいの中で、強心と心が響き合わない、あとあとまで強く印象に残らないんだらうな、と思つてたんですけど。

大槻 どうしてでしょうね。私にもわからないんですけどね。余計なことまで覚えてることはなかつたんですけどね。

宗像 いいえ（笑）。私も近代文学の勉強をしております、テキストだけ読んでいるものですから、もどかしいと思うことがございます。お話うかがいますと、背景とか、環境とかあらためてよくわかりますし、大変ありがたいことでした。

大槻 いいえ、なんにもお役に立てませんで失礼しました。

宗像 土地などもそうですね。私たちが地図を見ても、なかなか、それは平面ですから、浮かび上がつてこないんです。かつての動坂とか、団子坂とか、いまでも、よく思い出されたりしますか。

大槻 思い出しますよ。ことに鮮明に憶えてるのは、高村さんが、買い物籠から大根のしっぱだのネギのはっぱだのをこつ出して（笑）、のほつていらっしゃる姿なんかよく憶えてます。

宗像 ああ。

大槻 ちよつどね、高村さんところが空襲でね、焼けて、その十日か二十日、二十日ぐらいたつてからうちが焼けたんです。

宗像 そうですか。

大槻 それで、私、高村さんのところ通りましたら、焼け跡にね、高村さんしゃがんで、シャベルで何か掘つてましたよ、焼け跡を。そして「大槻さん、早く本だけは疎開した方がいいですよ」って、残念そうな顔しておっしゃつてらっしゃいましたね。だから、疎開の準備をしてるんですけど、って言って……

宗像 ええ。それは昭和二十年ですね。

大槻 あのと、残念そうな顔、高村さんの、ね。

宗像 いろんな思い出もねえ、そういうものも、ぜんぶ……

大槻 ぜんぶ、お焼きになつたんでしょう。

宗像 しゃがんでらっしゃったんですか。

大槻 うん。しゃがんでね、こつやつてシャベルで掘つてらっしゃつた。

宗像 いろいろ、掘り出したものたくさんあつたんでしょ。うね。

大槻 あつたんでしょ。うね、きつと。

宗像 それは、もう強く、今でも印象に残つていらっしゃつて……

大槻 はい、強く印象にのこつてます。

宗像 買い物籠にかけてというのも、非常に印象深いですけど、焼け跡にしゃがみこんで、というのも、大変印象深いですね。

大槻 戦争をご存じない方はお幸せですよ。私ら、一生のうちで、あの戦争のおかげでどれくらい損害を被ったかわかりません。精神的にも、時間的にも。

宗像 ほんとにいろんなものが、ものだけじゃなくて、こわされましたものね。

大槻 そうなんです。苦労しましたよ。

宗像 だから、逆に、その前の時代というのが大変輝くような彩りがあつて、うかがつていても大変楽しいですけれども。

大槻 うーん、まあね、皆さんがご自分の自由のままに生きてらしたですからね。その時は本当に、何て言うんですか、人間全体が、あつたかかつたですよ。いまみたいじゃなくね。

宗像 お住まいになつていた動坂というのは、文化の中心でもあつたわけですね。

大槻 いまでも思い出しますよ、茉莉さんが、トコトコ歩いてらつしゃるとこだのね。

宗像 ほんとに、土地や歴史というのは、そういうものですね。人の思い出と結びつくから、余計印象が強くなるんですよね。

大槻 うん、そうですね。ことにね、一人で暮らしておりますと、そういうこと普通思わないですよ。ですけど、こつやつてね、掘り起こして下さると、いろいろ昔のことを思い出します。

宗像 あんまり長くなつてもいけませんので、また、機会が

ありましたら、うかがわせていただければと思います。今日は本当に長い時間にわたつて貴重なお話うかがわせていただいてありがとうございます。

大槻 ああ、いいえ。どうぞお気軽にして。

兼築 どうもありがとうございます。

(了)